

フックウェイのアブダクション論

村中達矢 (金沢大学)

1 はじめに

本論文では、クリストファー・フックウェイ (Christopher Hookway, 1949 -) のアブダクション (仮説形成) にかんする議論を検討したい⁽¹⁾。フックウェイはイギリスのパーズ哲学研究者である。アブダクションは推論ないしは議論の一種であり、チャールズ・サンダース・パーズ (Charles Sanders Peirce, 1839 - 1914) によると、それは「検証されるべき仮説を選択する過程」(CP 7.245)⁽²⁾である。パーズは他にアブダクションのことを次のようにも説明している。「仮説が最初に出現し、それを受け入れることは、それについての素朴な疑問としてであろうとどんな程度の確信を伴ってであろうと、推論的な段階であり、この段階のことをアブダクションと呼ぶことを私は提案する」(CP 6.525)。さらに、パーズの理論においては、アブダクションは演繹と帰納のどちらとも異なる原理に依拠するものとみなされている。フックウェイは2012年の著書の中でアブダクションの結論にかんする問いを取り上げていて、その問いというのは具体的には、「アブダクションの結論はどのような形式をとるのか」、「アブダクションの結論に対してどのような認識的態度をとるのが合理的か」、「我々は探究のアブダクティブな局面で持ち出された仮説に対してどのような認識的態度をとるべきか」、「アブダクティブな議論の前提を信じると仮定すると、我々はその議論の結論に対してどのような認識的態度をとるべきか」といった問いである。これらの問いに答えるにはアブダクションにかんする込み入った議論を整理する必要があり、フックウェイはこれらの問いにかかわる議論を彼なりに整理し理解しようと試みている。本論文ではその試みを検討したい。本稿の目的はアブダクション研究を前に進めることに貢献することである。そこでまずアブダクションに特有の性質にかんするフックウェイによる論点整理を概観し (第2節)、議論と推論の区別および議論の論理と推論の規範の区別についての彼の議論を押さえ (第3節)、次にアブダクションに特有の性質についてのパーズの説をより明晰にしようとするフックウェイの試みを取り上げ (第4節)、アブダクションの結論に対する推論者の適切な認識的態度をめぐるフックウェイの議論を検討し (第5節)、さらにアブダクションの結論は疑問法 (interrogative mood) の形態の何かであるというパーズの主張を理解する仕方のフックウェイによる二分法を取り上げ (第6

研究論文

節)、最後に私なりの見解を述べる(第7節)。検討の方法というほどのことでもないが、できるだけ視野を広くし、物事の全体像や見晴らしを見失うことのないよう心がけて論述を進めていきたい。また自由な発想の妨げとならないよう、言葉づかいを過度に型に嵌めないようにも気をつけたい。

2 アブダクションに特有の性質

フックウェイはアブダクションの結論について議論する前に、何がアブダクションに特有なのかについてのパースの説明を明晰にしようとしている⁽³⁾。そうするにあたってフックウェイはまず、アブダクションに特有の性質は何かについてのパースによる説明を大きく第一の説と第二の説の二つに分けて、次にそれらの説がそもそも何を表わしているのかを明らかにしようとする。フックウェイのいう第一の説は、彼によると、「探究過程の中におけるアブダクションに特有の機能的役割を記述する」(Hookway 2012: 72) 説である。フックウェイはこの第一の説を次のように説明している。

〔第一の説〕は、探究過程の中における推論の…基本的な機能的役割…を利用する。…仮説を考え出してそれからその仮説には本腰を入れて取り上げる価値があるのかを判断するという働きが存在する。仮説を本腰を入れて取り上げることは、その仮説を信じることあるいはそれが真だと受け取ることを伴う必要はない。むしろ、それはその仮説を経験的に検証すること、あるいは証拠を集めることを決めるということに伴うことがある。なお、ここで証拠というのは、その仮説を受け入れることが正当化されるのかを我々が判断することを可能にしてくれる証拠のことである。…〔アブダクション〕はどんな仮説を本腰を入れて取り上げるかという点で我々を導く。…探究のアブダクティブな局面は〔仮説を検証する〕局面の方向を決めると言うことができるかもしれない。(Hookway 2012: 72 - 73)

この第一の説について述べているところでフックウェイは、パースの見解を踏襲して、探究過程の中の仮説を経験的に検証する段階は帰納の一種だと言っている⁽⁴⁾。だが、カール・ポパーの言うように探究のこの段階で仮説が反証される場合には帰納は使われない (Popper 1959: 33)。ではどういった場合にこの段階で帰納が使われるのかといえば、それは例えば、一つに検証を受ける仮説が全称命題であり、二つに仮説の検証に使われる経験的データが時間・空間上

研究論文

の全てではなく一部のデータであり、そして三つに検証をした結果、仮説が正しいと結論づけられるという三つのこと全てが満たされる場合である。このときには、特殊的・個別的な内容である経験的データを前提として一般的・普遍的な内容である「その全称命題である仮説は正しい」という結論を導く帰納が行われる。

他方で、フックウェイのいう第二の説は、彼によると「アブダクションを別個の形式の議論と認定する」(Hookway 2012: 72) 説である。フックウェイによると、パースが書いた次の文章はその第二の説を表わしている。

[アブダクション] というのは、我々がある非常に奇妙で興味をそそる状況に出くわし、その状況が「その状況はある一般的規則の事例である」という仮定によって説明されるときに、その結果としてその仮定を採用することである。あるいは我々がある点で二つの対象に著しい類似性があることを知り、それからそれらは他の点でも互いに著しく似ていると推論することである。(EP 1: 189)

この文章はパースが 1878 年に公表した論文の一節であり、このころ彼は類推をアブダクションの一種とみなしていたことが分かる。この第二の説でパースは次のようなアブダクションの例を挙げている。

この袋に入っていた豆はみな白い。

これらの豆は白い。

したがって、これらの豆はこの袋に入っていたものだ。(EP 1: 188)

3 議論と推論の区別および議論の論理と推論の規範の区別

以上の二つの説がそもそも何を表わしているのかを、フックウェイはより明晰にしようとする。そうする際に彼は議論 (argument) という用語と推論 (inference または reasoning) という用語を区別して用いている。パースは「合理的に明確な信念を生じる傾向のある思考過程」(EP 2: 435) という意味で議論という用語を使っていた。しかし、「[パースは議論と推論]の区別について常に明晰であったわけではな [い]」と述べたり「[パース] は形式的議論のパターンと推論の構造を同一視しがちであった」と述べたりしているところを見ると、フックウェイはパースとは違った意味で議論という用語を使っている可能性がある (Hookway 2012:

研究論文

74, 75)。だとすると、その違いを押さえずにフックウェイのアブダクション論についての検討を進めると、その検討の内容に混乱をきたす恐れがある。フックウェイの解説によると、議論は我々が推論や探究をする中で使用される。また議論は我々が推論を自己統制するとき用いられる。我々は信念を獲得する理由として議論を引き合いに出すことがある。このようなものとしての議論は、形式論理学によってその抽象的構造が扱われる。以上のように彼は議論のことを説明している。議論は、何か人間が現実に行う推論を超えた存在とみなされているようである。それに対して、彼によれば、推論には「形式的議論の継起以上のものが含まれ」ている。推論は、「論理学者の形式的パターンによって隠される全体論的特徴を常にもつ」(Hookway 2012: 74) とされる。ここで全体論的というのは、推論で使われる議論が演繹かどうかということだけではなく、推論の経験的な適切さにかかわってくるありとあらゆる事柄全体にかかわるということを言っていると考えられる。あるいは、推論が全体論的であるとは、結論として提起される一つの命題を信じるべきかどうかということだけにかかわるのではなく、それに関係している命題、例えば議論の前提を信ずるべきかどうかにもかかわるということなのかもしれない。

このように議論と推論を区別した上でフックウェイはさらに、ギルバート・ハーマン (Gilbert Harman, 1938 -) にならって、議論の論理と推論の規範を区別するべきだとも主張する。(Harman 1986; Hookway 2012: 74) フックウェイによると議論の論理は、前提が真ならば結論も真であるに違いない議論を妥当とみなす。例えば、

この袋に入っていた豆はみな白い。
これらの豆はこの袋に入っていたものだ。
したがって、これらの豆は白い。

という議論をこの論理は妥当とみなすとされる。ここで妥当とみなされる議論は演繹のことだと考えられる。つまり、ある議論が演繹かそうでないかを判別する働きをするのが議論の論理だと考えられる。それに対して推論の規範は、フックウェイによると、認識的規範とも呼ばれるもので、彼はこの規範のことをおおよそ次のように説明している。先に見た演繹(妥当な議論)の例における二つの前提、「この袋に入っていた豆はみな白い」と「これらの豆はこの袋に入っていたものだ」を受け入れた人たちに「それらの豆は白以外の色をしている」と考える独自の理由があるのなら、推論の規範はその人たちに結論から前提へと後戻りして前提の真偽を確かめることを要請する(Hookway 2012: 74)。以上の説明から考えると、推論の規範とは、

研究論文

推論者にある推論で使われる議論が演繹かどうかを知らせるのとは違った仕方での推論を経験的により適切なものにする方法を知らせるものことだと考えられる⁶⁾。また、このフックウェイによる説明で述べられているようにして前提の真偽を確かめるという推論の特徴は、先に見た推論がもつ全体論的特徴の例だと考えられる。

4 アブダクションに特有の性質についてのパースの説をより明晰にしようとする 試み

ここまで見てきた議論と推論の区別、そして議論の論理と推論の規範の区別の二つの区別を採り入れているところが、パースのアブダクション論にはなかったフックウェイの議論の新しいところだと言える。これら二つの区別を利用すると先に見たアブダクションに特有な性質についてのパースの二つの説についてどういうことが言えるのかにかんして、フックウェイは次のように説明している。フックウェイによると、第一の説は議論と「推論の中でその議論を使用すること」を暗黙的に区別しているが、この説は推論または探究の規範については何も述べていない。以上の議論に基づいて、第一の説は次のことを表わしていると解釈することが可能だとフックウェイは述べている。

〔アブダクション〕には探究過程の中における一つの特定の局面での特殊な役割がある。その局面というのは、我々が一つの仮説に到達する局面であり、その仮説は帰納的検証にかけられるべきである。(Hookway 2012: 74)

フックウェイのいうようにこの第一の説では推論や探究の規範については何も述べられていないと言うことができるが、我々はこの説に基づいて「探究過程の中における一つの特定の局面では我々はアブダクションをするべきだ」と主張したり、あるいはより控えめに「その局面では我々は後件肯定をしてアブダクションをしても構わない」と主張したりすることができる。そしてこれらの主張は規範を表わしていると言うこともできるのではないだろうか。

他方で第二の説は、彼によれば、議論と「推論の中でその議論を使用すること」を区別しておらず、それらを共に行っている。この説は、彼によれば推論または探究の規範あるいは認識的規範を述べている。さらに彼によれば第二の説はアブダクションの前提が正しい場合に何をすることが許されるのかを我々に告げるのであり、より具体的には、「アブダクションの前提はある命題に対して暫定的に仮定するという態度をとる理由を我々にもたす」ということを

研究論文

我々に告げる。この第二の説はどういうことを支持するのかについて、フックウェイは具体例を挙げて次のように説明している。この説は、先に見たアブダクションの例で言えば、「前提が真であることが『これらの豆はこの袋に入っていたものだ』という〔結論〕を暫定的に受け入れることを我々に保証しないだろうという状況がありうる、ということをサポートする」(Hookway 2012: 73)。そういう状況というのは例えば「白い豆の入った他の袋が周りにある」という状況や「その袋から豆は取り出されていないと信じるしつかりした理由を我々が手にしている」という状況のことだと彼は述べている (Hookway 2012: 73)。そのような状況を考慮した結果、その結論は受け入れないことにするという推論の特徴もまた、先に見た推論がもつ全体論的特徴の例だと考えられる。こうした議論を踏まえて、アブダクションのパスによるより形式的な扱い方あるいは定式化がどのようなものであるかについて、フックウェイは、その定式化自体が「いつ我々はある前提の集まりのことをある命題に対して特定の態度をとる理由をもたらししているとみなすことができるのかを規定する、無効化されうる規範」をとらえていると解釈することが可能だと主張している (Hookway 2012: 74)。そして第二の説はそもそも何を記述しているのかについては次のように解釈することが可能だとフックウェイは述べている。

〔パス〕は次のような推論のパターンについて記述している。適切な状況においては、そして他の条件が同じならば、パスによる定式化の「前提」に表わされている情報は、その「結論」に表わされている命題に対して特定の認識的態度をとる理由を我々にもたらす。(Hookway 2012: 74)

5 アブダクションの結論に対する推論者の適切な認識的態度をめぐる議論

以上のようにアブダクションに特有の性質についてのパスの説をより明晰にしようと試みた上で、フックウェイは次に推論者のアブダクションの結論に対する適切な認識的態度にかんするパスによる記述について論じている。アブダクションには、推論者が結論に疑問の念を抱きつつその結論を表明する事例から確信をもって結論を示す事例まで、推論者が結論の内容の正しさに寄せる信頼の点でさまざまな度合いの事例がある、とパスは次のように述べている。アブダクションは「さまざまな事例において、注目し返答するに値する問いとしてその〔結論としての〕仮説を単に疑問法で表現することから、尤もらしさのあらゆる評価を経由して、信じたいという制御できない意向にいたるまで多岐にわたる」(EP 2: 441)。フックウェイ

研究論文

イは、アブダクションのある事例においては強く伴われるその結論に対する疑問の念と、別の事例において強く伴われる結論への確信のそれぞれにまつわるさまざまな事柄両方について、2012年の著書で順番に論じている。科学において仮説はどのように形成されるのか、あるいは我々は仮説をどのように形成するべきかという主題と人間に信仰が発生するのはどのようにしてかという主題はかなりかけ離れた主題のように思われるが、パースのアブダクション論ではこれらのどちらもアブダクションの事例にかんする主題として扱われている。これは、科学と宗教というように分野は違えども、どちらも新たな考えが発生する認識過程についての主題だからだと考えられる。科学で行われる仮説形成については、パースのアブダクション論では、アブダクションの結論を疑わしいもの、これから検証を受けるべきものとみなす議論の中で論じられている。科学において我々はいかに仮説を形成するべきか、つまり仮説を形成する方法については、パースは研究経済論 (theory of the economy of research) ないしは研究経済学 (economics of research) と呼ばれる理論として具体的な提案をしている。もしその理論で提案されている仮説形成の方法の一部が応用されていれば、光学の研究は50年は早く進んでいただろうとパースは述べていて、彼は自分の提案した方法を応用すれば科学の諸分野の進展を早めることができるということにかなり自信を持っていたようである (EP 2: 110)。他方で、人間に信仰が発生する認識過程については、パースは推論者が結論に確信をもつアブダクションにかんする議論の中で論じている。

パースは「純粋なアブダクションにおいては、仮説を疑問 (interrogation) としてではなく受け入れることは決して正当化されえない」(CP 6. 528) と述べていて、彼は推論者が結論の内容に確信を持つアブダクションの事例を純粋なアブダクションには含めていなかったようである。またパースはおおまかにアブダクション一般について、その「結論は疑問法の形態で導かれる」と述べたり「アブダクションは推論者に〔結論〕のことを…多かれ少なかれ疑わしいとみなすことを求める」と述べたりもしている (EP 2: 287, CP 2. 775, Hookway 2012: 75, 77)。パースのこれらの主張を受けて、フックウェイは「アブダクションは疑問表現 (interrogative) ではない何か、つまり仮説へのある程度の確信を生じうる」という考えよりも「アブダクションの〔結論〕は疑問文 (question) である」という考えや「アブダクションの結論は『疑問法の形態』の何かである」という考えの方がアブダクションにかんする基本的な考え方だとパースはみなしている、と述べている (Hookway 2012: 75)。

6 アブダクションの結論は疑問法の形態の何かであるというパースの主張を理解する二通りの仕方

研究論文

フックウェイは先に見た議論と推論の区別などを援用してこの「アブダクションの結論は疑問法の形態の何かである」という主張を理解する二通りの仕方を示しているが、それらの理解の仕方のうちどちらがより正しいのかについては何も言っていない。一つ目の理解の仕方は、本来パースはアブダクションの例を

この袋に入っていた豆は白い。

これらの豆は白い。

したがって、これらの豆はこの袋に入っていたものではないか？

というように結論を疑問文で書くべきだったのだが、彼はアブダクティブな議論のパターンを間違って表現したのでそうは書かなかった、という理解の仕方である (Hookway 2012: 76)。この理解の仕方を使った場合、推論者が結論に確信を持つアブダクションの事例のことをどういうものだと理解すればよいのであろうか。そのようなアブダクションの事例においては、まず推論の中でこのパターンのアブダクションの議論が使われて疑問文が生じ、次にその推論の中である命題への確信が生じる、と理解されることになるのだと考えられる。もう一つの理解の仕方は、フックウェイによると、一つに論理的構造を表わす形式的パターンと人間が行う推論のパターンの区別を利用し、二つにアブダクティブな議論のもともとの定式化を保持する。その結果、アブダクティブな議論の結論は、先に見た例で言えば、「これらの豆はこの袋に入っていたものだ」という命題を表わすと考える。三つに、この理解の仕方は、命題とはどういうものかにかんするパースの次の見解に基づく。

同一の命題は肯定されるかもしれないし、…疑問文として述べられるかもしれないし、…あるいは単に言い表わされるかもしれない。だが、そのことによって別の命題になることはない。(NEM 4: 248; EP 2: 312)

その上でこの理解の仕方は、フックウェイによると、アブダクティブな議論を推論過程や探究過程の中で考慮するとき、我々は結論の命題を疑問文として述べることによってその議論を解釈する、と考える。あるいは、そのとき我々はその結論の命題は真かという疑問文を本腰を入れて取り上げることによってその議論についての理解を表わす、と考える。さらに彼によるとこの理解の仕方は、推論過程や探究過程の中でアブダクティブな議論の結論である命題を示さ

研究論文

れると、我々は自分の目的や予備的信念から影響を受けつつ、時にはその結論を信じ、時にはそれを疑問文として述べる、と考える (Hookway 2012: 76)。

これらの理解の仕方の違いは、疑問文が推論過程の中で生じるのは議論の中においてかそれとも推論過程の中の議論が使われた後の部分においてか、というところにある。したがってどちらの理解の仕方がより正しいのかを知るためには、疑問文は実際にどちらの仕方で生じているのかを確かめなければならない⁽⁶⁾。また、これらの理解の仕方は、アブダクションのあらゆる事例で疑問文が生じると考えるか、それとも特定の事例でのみ疑問文が生じると考えるかという点でも違っている。二つ目の理解の仕方ではアブダクションには疑問文が生じない事例もあると考えられている。フックウェイは「アブダクションは仮説へのある程度の確信を生じうる」というパースの考えについても詳細に検討しているが、それについてはまた別の機会に検討することとしたい⁽⁷⁾。

7 おわりに

パースが一方でアブダクションの結論は疑問法の形態で導かれると言い、他方ではアブダクティブな提言は尤もらしくなければならないと言っていることを指して、フックウェイはこれらは矛盾しているように見えると言っている。だが、これらはどちらもアブダクションのあらゆる事例が持つ性質を表わしているのではなく、多くの事例が持つ性質を表わしていると捉えれば、何ら矛盾していないと考えることができるのではないだろうか。つまり、例外的に疑問法の形態で導かれることのないアブダクションの結論もあるし、例外的に尤もらしくないアブダクティブな提言もあると考えれば、その矛盾を解消することができる。⁽⁸⁾パースはアブダクションの形式を

驚くべき事実Cが観察されている。

だが、もしAが真ならばCは当然のこととなるだろう。

したがって、Aは真だと思ふ理由がある。(EP 2: 231)

と表わしてもいるが、この形式もアブダクションのあらゆる事例の形式を表わしているわけではないようである。知覚判断はアブダクションを必要とし、そこで必要とされるアブダクションは無意識に行われるもので制御不可能だとされている (EP 2: 191, 229; Hookway 1985:

研究論文

155)。そしてこの形式の第一前提に出てくる驚くべき事実を認識する過程は知覚判断の事例である。よって、この形式は知覚判断で必要とされるアブダクションの形式を表わしてはいないと考えられる。むしろこの形式は説明とは何かをよく表わしていると解釈することができる。驚くべき事実と当然のことは我々にとって対照的な事柄であるが、この形式を元に戻すと、説明とは驚くべき事実を観察することから、仮説の発生を伴いつつ、当然のことへと進んでいく認識過程のことだと理解することができる。話を元に戻すと、パースのアブダクションに特有の性質についての見解は、アブダクションのあらゆる事例について述べているのではなく例外もありうるという理解することによって、我々はアブダクションを無理なく適切に解釈することができることが多いのではないだろうか。以上に見てきたフックウェイの議論から、アブダクションにはその結論の内容の正しさに対する推論者の疑問の念がしばしば伴うのであるが、その疑問の念の出所は推論の中で使われる議論の形式の中なのかそれとも推論過程の中の議論が使われた後の部分なのかは不明であり、その疑問の念が強いとか中位か全くないかは事例ごとに異なると言うことができる。そして同様のことはおそらく推論者が抱くアブダクションの結論への確信についても言えると考えられる。

謝辞

「社会性認識と自閉症スペクトラム障害に関する文理融合型研究の海外展開プログラム」（金沢大学、日本学術振興会 組織的な若手研究者等海外派遣プログラム）により 2011 年度にシェフィールド大学のフックウェイ教授を訪問させていただきました。貴重な体験をさせていただいた同海外派遣事業にこの場を借りてお礼申し上げます。

注

- (1) フックウェイのアブダクションにかんする議論は優れたものであり、また注目すべきものでもあると思われるので、本稿では彼のアブダクション論を取り上げる。アブダクションは、フックウェイも言う通りパースの用語であり、またフックウェイはパース哲学研究者である、よって、フックウェイ自身の見解とパースの見解は、区別することはできるが分離することはできない。本稿は、基本的にフックウェイの見解自体について論じつつ、適宜必要に応じてパースの見解にも触れる。
- (2) 以下ではパースのテキストを次のように略記する。

Peirce, C. S. (1931-1958) *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, eight volumes, edited by C. Hartshorne, P. Weiss, and A. Burks. Cambridge, MA: Harvard University Press. [CP n. m と略記。n は巻数、m はパラグラフ番号。]

—— (1976) *The New Elements of Mathematics*, four volumes in five books, edited by Carolyn Eisele. Atlantic Heights, NJ: Humanities Press. [NEM n: m と略記。n は巻数、m はページ数。]

—— (1992-1998) *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, two volumes, edited by N. Houser, C. Kloesel, and the Peirce Edition Project, Bloomington, IN: Indiana University Press. [EP n: m と略記。n は巻数、m はページ数。]

- (3) フックウェイは著書 *The Pragmatic Maxim: Essays on Peirce and Pragmatism* の Section 4. 2 でアブダクションと最善の説明への推論は異なるという主張を支持する議論を行っている。その議論はおおよそ次のようなものである。「最善の説明への推論は、その推論を受け入れる確かな経験的根拠をわれわれにもたらすのであり、そして経験的証拠に基づいて仮説を検証するというのは、〔アブダクションではなく〕帰納がやることである。…もしアブダクションに特有の性質を理解すれば、われわれはアブダクションと最善の説明への推論を区別するに違いない。」(Hookway 2012: 72、〔 〕括弧内引用者。以下同様。)
- (4) この仮説を実験的あるいは観察的に検証する機能、「何を信じるのが正当化されるかという点でわれわれを導く」(Hookway 2012: 72) 機能、「説明が最善かどうかを判断する」(Hookway 2012: 73) 材料をもたらす機能のことをフックウェイは探究過程の中における帰納の機能とみなしている。またパースは「何かが真である多くの事例から一般化を行い、その同じことがある集まり全体についても真であると推論する」(CP 2. 624) こと、「観察された事実と似た事実は、まだ検討されていない事例においても真であると結論づける」(CP 2. 636) 推論、「一定の事例の結果にかんして観察したことから規則を結論づける」(Liszka 1996: 63) 推論といった意味で帰納という用語を使っている。パース哲学研究者であるフックウェイも同様の意味でこの語を使っていると思われる。
- (5) パースがアブダクションを自己統制する方法として提案した研究の経済性の考慮は、ここで言う推論の規範の例を多く含んでいると思われる。研究の経済性の考慮についてはEP 2: 106-114などを参照。
- (6) 「疑問文は議論の中で生じる」という説と「疑問文は推論過程の中の議論が使われた後の部分で生じる」という説のどちらが正しいのかを経験的に検証するには、実際に引き起こすことのできる起きるかもしれないことのうち、片方の説が正しければ起こるはずであり、

研究論文

なおかつもう片方の説が正しければ起こらないはずである、そういう起きるかもしれないことをまず見定め、次に、それが実際に起きるかどうかを確かめてみればよいと思われる。そういう起きるかもしれないことが具体的にどういうことなのかは、今のところ不明である。

- (7) 本稿で取り上げたフックウェイの著書 *The Pragmatic Maxim: Essays on Peirce and Pragmatism* の Ch. 4 の Section 4. 4 以降については別の論文で論述を行った。(2019年1月30日)
- (8) ここでアブダクションの本質をどのように考えたらよいのかと疑問に思われる人もいるかもしれない。しかし、帰納によっては得られない、あるいはたんに特殊事例で成り立っていることを一般化するだけでは得ることのできない仮説を出現させるところをアブダクションの本質と考えればよいのではないだろうか。

参考文献

- Harman, Gilbert (1986) *Change in View: Principles of Reasoning*, Cambridge, MA.: MIT Press.
- Hookway, Christopher (2012) *The Pragmatic Maxim: Essays on Peirce and Pragmatism*, Oxford: Oxford University Press. (クリストファー・フックウェイ『プラグマティズムの格率: パースとプラグマティズム』村中達矢+加藤隆文+佐々木 崇+石田正人 訳、春秋社、2018年。)
- Liszka, James (1996) *A General Introduction to the Semeiotic of Charles Sanders Peirce*. Bloomington: Indiana University Press.
- Peirce, C. S. (1931-1958) *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, eight volumes, edited by C. Hartshorne, P. Weiss, and A. Burks. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- (1976) *The New Elements of Mathematics*, four volumes in five books, edited by Carolyn Eisele. Atlantic Heights, NJ: Humanities Press.
- (1992-1998) *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, two volumes, edited by N. Houser, C. Kloesel, and the Peirce Edition Project, Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Popper, K. R. (1959) *The Logic of Scientific Discovery*, Harper Torch Books. (カール・R・ポパー『科学的発見の論理』全2巻、大内義一+森博 訳、恒星社厚生閣、1971年-1972年。)